

講演会・講演要旨

「令和の日本型学校教育の構築」

講師：奈須 正裕 氏

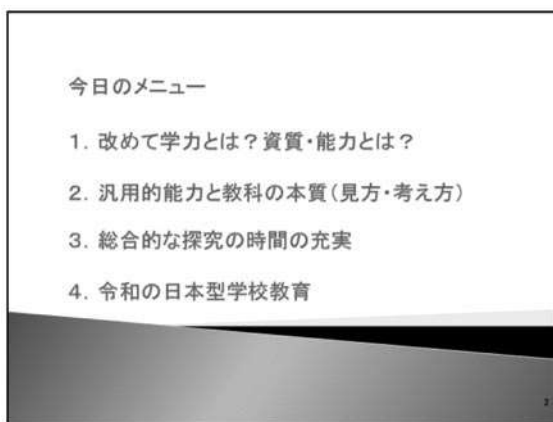
上智大学総合人間科学部教育学科教授

中央教育審議会教育課程部会委員



みなさんこんにちは。今日は貴重なお時間をいただきましてありがとうございます。少しまとまったお話をとしたいと思います。私自身はずっと普通科それから教育学部を歩んできた人間で、本当に産業教育にかかわるといことはなかったのですが、中教審の議論でも高校教育や学校教育をどうするかと言ったときにどうしても産業教育のことが抜け落ちているような気がします。

今日お話しすることは、高校だけじゃなくて小中あるいは大学を含めてですけど、日本の学校教育あるいは教育が、従来の産業教育がやって見えたこと、あるいはそこでお持ちになっている多様なノウハウを学ぶことがとってもあるなど、そんなことに結果的になるのではないかと考えています。最後に普通科の改革ということが今進んでいますけれども、これは普通科が悪いというよりも、やっぱり時代が変化してきた、求められる学力論、あるいはもっと言えば人材像が変化してきたんだということがあってと思っています。



今日は4つ欲張ってお話を申し上げようと思っているのですが、一つ目は改めて学力ってなんだろうという話です。今回の指導要領では資質・

能力って言葉が使われていますけど、これのことを中心にとします。二つ目は、教科をどうやるか、ここでの教科は専門学科の教科というよりは、伝統的な普通科や小中学校の教科のイメージですけど、そこもやっぱり変えていくということです。教科の学習というと、何か暗記中心、あるいは座学中心というイメージがありますが、ここも変えていかないといけない。教科は元々もっと面白いものじゃないか、子供が学び甲斐があるものじゃないかと思っています。それから三つ目として総合的な探究、小中学校の総合的な学習です。私自身は総合的な学習を指導要領でも担当させていただいてきました。色んな学校と一緒に作ってききましたけれども、総合的な学習というのはこれからの学力とか学校を考える上では1つのカギになると思います。高校も今すぐく総合を頑張ってください学校が増えてきてありがたいなと思うんですけど、これは専門学科では「課題研究」で代替していますし、あるいはSSH、SGHのノウハウが効いてきているわけです。最後に令和の日本型学校教育。21年の1月に出た中教審答申は、「個別最適な学びと協働的な学び」という言い方をしますけれども、日本は一斉学習、集団でやってきました。もっと一人一人のありよう、一人一人の個性というものを重視する。これは産業界におけるイノベティブ人材の養成というものがもちろん影響しています。さらにはグローバル化が進んでくる中で、多様な背景を持つ子供が学校に来ているわけですが、その一人一人誰も辛い思い、悲しい思いをさせずに、学びということを保証していこうじゃないかという動きであります。

まず学力とは何かということですが、学力ってなんですか。私は小学校の教員養成系の出身ですけど、そこで教わったのは、学力というのは毎時間毎時間一つ一つのことを確実に子供たちの中に入れていくことだということでした。方法は色々あるにしても、1時間に1つ着実に子供の中に入れていこうと、レンガを積み上げるようなイメージです。テストも私たちが積み上げたレンガが1個1個教えた通りに教えた場所に収まっているか、それを確認しよう、入試に至るまでそんなことだったかなと思うのです。つまり「何を知っているか、何をどれだけたくさん多く教わった通りに知っているか」、これが学力だったと思います。これを内容中心のコンテンツ・ベースといいます。

これに対して、資質・能力を基盤としたコンピテンシー・ベースというのがあります。持っていることを使って生きていくために僕らは実は多くの知識を子供たちに教えてきたし、子供も一生懸命学んできた。つまり子供たちが一生懸命な場面で多様な問題解決を粘り強くやっていくときの武器や道具や材料になるのです。しかし、僕らが教えている教科の学力というのは残念ながらそうならないような気がするのです。色んなことを知っているのだけでも使えない。宝の持ち腐れ学力になっているのです。これは僕らの先輩たちもずっと気にはしてきたことですが改善されてないのではないかと思われるのです。資質・能力というのはこれを変えていこう、資質・能力を英語でコンピテンシーといいますけども、コンピテンシーというのは有能さという意味です。有能さっていうのは、問題解決が的確にとか個性的にとか創造的にできるということなのです。知識がいらぬということを持っているわけではありません。知識がありさえすれば、また知識があっただけうまくいくという風に簡単にいくわけではない。大事なことは知識があることだけじゃなくて、問題解決が的確にできること、つまり有能さを兼ね備えることだろうと思います。

ただ多くの場合、有能さを支える一番大きな要因は知識かもしれません。だから僕たちは知識を教えてきた。ただいつの間にかそこで手段と目的が逆になったかもしれません。そこをちょっと考え直そう。知識を教えるのは何のためだったか。それを存分に使って自分らしく生きていくためだと。逆に言えばそこを直接的にターゲットとして見据えた教育にやり直したほうがいいのではないかというのが資質・能力を基盤としたという考え方です。

だから、資質・能力を基盤としたコンピテンシー・ベースというのは知識軽視ではないです。ただ知識が問題解決にまで届くようにしようということなのです。これまでは何をどれだけたくさん知っているかということ足場に教育を組んでいきましたけど、もう直接的にどのような問題解決を現に成し遂げるかということを見据えて教育をしたほうがいいのではないかということです。だからテストも変わってきたのです。ただ知っているだけでは答えられない、知っていることを使って初めて出会う問題場面で問題解決ができる。そこまで含めて学力にしようじゃないかということです。

この資質・能力、コンピテンシーというのは案外古い言葉です。1970年代に一つの転機がありました。デイビッド・マクレランドというハーバード大学の心理学者ですけど、彼は感情とか意欲の研究をしていたので、人生において感情や意欲はとっても大事だと思っていたのです。ところが教育界の人に聞いたら、「知識の量が勝負を決めるのですよ」と。でも本当かなと思ったので調べたら、知識をたくさん持っている、子供の時は成績が良かった、資格をたくさん持っているとかいう人が40、50になったときに、社会経済的に成功しているか、あるいは身体的に精神的に健康に生きているか、あるいは職場や地域で人望があるか、というと、あまり関係がなかったのです。

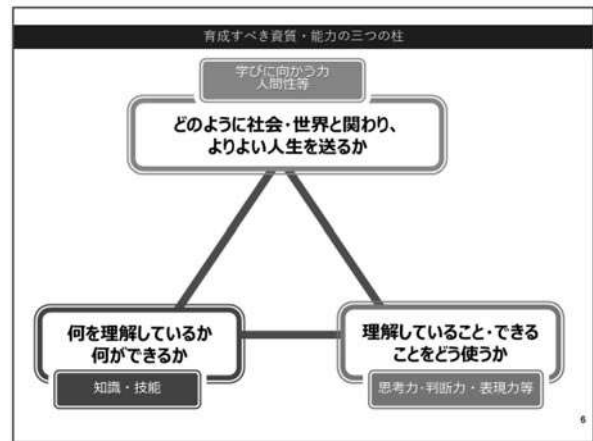
でも、逆はありませんか。高校時代あまり勉強が得意じゃなかったけれども、久々に同窓会で

会ったりするとすごく頑張っちゃんやっっている教え子。

知識は大事なのです。子供たちもできたいと思っているんです。でも知識さえあれば上手くいくわけじゃないし、知識がなければお先真っ暗ということでもない。じゃあ他にどんな要因が大事かということの研究していますけど、意欲とか感情の調整能力とか対人関係能力とか、こういったものが実は知識と同列かそれ以上に影響力があるのです。

今日は企業関係の方がたくさんいらっしゃいますけど、企業の経営とか、人材登用の仕方、人事のやり方が70年代から80年代に変わってきました。だからひょっとしたらコンピテンシーという言葉はそういう人事管理の問題、コンピテンシー・マネジメントって経営学で言いますが、企業関係の方はむしろそちらでよくご存じかもしれません。すると、例えば人を採用したり昇格させたりするのにペーパーテストだけでやっていいのかって話です。本当にそれでいい人が採れているのだからってことを考えないといけない。企業がそうなってくると教育も見直そうということになってきました。学力論を刷新しよう。優れた問題解決に必要な要因、これがコンピテンシーですけど、これ全部が学力だと考えようということです。つまり学力をもっと拡張しよう。そうなってくるとさっきの感情の自己調整能力とか対人関係能力、非認知能力といいますけど、これが大事だということになってきます。

さらに思考力、判断力、表現力ということももっとしっかりやっていかなきゃいけない。また、知識・技能の質ですね。教科の勉強で知識を教えているわけですけど、ただ知ってるのではなくて使われるような知識にしていかなきゃいけない。それで、こんな3つの学力論になってきたのだということです。知識は引き続き大事ですけど、思考力や学びに向かう力もあって初めて人間は問題解決がしていける。



1970年代のお話をしました。ずいぶん古い話ですね。半世紀も前に学術的に分かっていたのに、なんでこんなに時間がかかったのでしょうか。

これは社会の変化です。さすがにもう知識だけじゃダメだという話に社会の産業構造が変わってきた、経済状況が変わってきたということがあります。こういう風にどんどん変わってくる時代になると、正解をたくさん頭の中に詰め込んでおいてもあまり意味がない、役に立たないということになってきます。すると学力論が変わってくる。一番大きいのは要素的な知識や技能を所有するという価値が低下するということです。

もう今、日本の小中学校には6歳児にギガ端末が来ています。高校もどんどん配布されると思います。目の前にコンピュータがあって、いつでも使えるのです。インターネットに繋がっているのです。先生が情報提供するということを中心にする必要はない。つまり教師がやるべきことがちょっと違ってくるのです。

これまではそういうのが無かった。だから私も免許教科が社会科ですけど、まず社会科はもちろん考える教科です。ただ考える前に材料がないと。その材料を私が教えないと。ということで、ただ教えているうちに50分終わっていたのです。だから社会科は暗記物と言われました。そこが変えられる時代になったのです。喜ばしいことです。実を言うと。だから知識を軽視しているのではないのです。情報を所有するということを超えた学びに行ける時代になった。

一方で型にはまった仕事が機械にとって変わられるという心配もありますけど、もう皆さんご案内の通りコンピュータと人間は違います。むしろコンピュータを、あるいはロボットを存分に使って、人間こそがやるべきこと、人間がやらなきゃいけないことを学校はしっかりと教えるべきだということですよ。

そういう人材を社会も求めているだろうと思います。人間にこそできることってというのは、何でしょう。価値の判断とか創造とか意志の決定とか多様な多者との協働、こういうことは機械にはできませんし、また機械にさせてはいけません。人間がやるべきこと、そしてそれによって人間が新たな価値を創造し、経済を先に進めていくということだと思います。

逆に言うと、従来型の教育には人間の機械化の面があったのではないのでしょうか。7桁×5桁の計算が速くできる、つまり人間を計算機にしようとしていたのではないかと。とにかく頭の中に膨大な知識を詰め込んでいく。人間をハードディスクにしようとしたのではないかと。昔は機械がなかったから、計算機がなかったから、それも必要だった。あるいはそれが競争的学力だった。もはやそれは競争的学力ではありません。

その意味で言うと、AI化の進展とか Society 5.0 というのは教育の人間化のチャンスです。僕らはもっと人間を人間に育てるためにテクノロジーを使っていく。その最前線がまさに産業教育だったんじゃないかなと思うんです。そういうことがもっと普通科の教育にも、そして小学校や中学校にも及んでくる時代になるのではないかなと思います。

でもこんなことを言われる方がいます。「でもね、大学入試があるからそう簡単にはいかないでしょう」。いや、入試は変わってきています。すでに私立大学入学者の半数はAOや推薦入試。推薦入試も指定校推薦じゃなくて自己推薦とか公募制推薦、あるいはAO、アドミッションオフィス入試ですけども、生徒たちは自分たちがどんなことをやっ

てきて、この大学で何をしようと思っていて、そのためどんな準備をしていて、そういうことをちゃんとアピールできたり、きちんと論理的に書けるか、その子が持っている実力、まさにコンピテンシーが見られてしまう。

じゃあ実際に授業はどうするか。まず教科から考えましょう。何もかも教えるような教科の授業をやめるのかな、暗記型の教科はやめるのかなということですよ。中教審答申でもこんな言い方をしています。「新たに取得した知識が既存の知識と関連付けられたり、組み合わせられたりして、様々な場面で活用される。」

実は活用されるためには、ばらばらの知識ではいけないんです。これとこれが意味的に繋がっていると、訳が分かっていると、この教科はいつもこの事を考えていけばよく考えられるとか、そういう構造化された知識になる。

アメリカでは、1980年代に「網羅」する学習から「看破」する学習ということが言われていました。「網羅」する学習というのは、伝統的なさっきの社会科の暗記物みたいな、煉瓦を積み上げていくように全部を教える。全部を教えようとするから先生も子供もとにかくあまり考えないで暗記する。でもそれでは使える知識にはなりません。

じゃあどうするか。「看破する」というのですが、本質が見通されている。この教科はここがポイントだということがわかって勉強している。個々のコンテンツ、内容を生み出し、それらを集約的に整理する教科の本質。一つ一つの教科にはその本質というのがあります。

今回の指導要領では、これを「見方・考え方」と言っています。理科の見方・考え方、数学的な見方・考え方、それをしっかり教えよう。先生方はそれを踏まえて授業していらっしゃるんですけど、特に高校の先生は生徒に伝わってないのです。そこが生徒に伝わるようにしようということなのです。

わかりやすく具体的にお話しましょう。見方・

考え方というのを考えるには、こんなことを考えたいのです。

教科には対象と方法がある。教科は中身もあるけれど、世界をみる独特な見方を子供に教えているのです。一つ一つのその教科ならではの世界観、世界に対する迫り方、これを教えている。それは一生涯あの子たちが行きていく中で使いこなしていくものです。

いろんなものの見方、いろんな世界の切り取り方、それが子供たちの世界を豊かにするのではないですか。またそれをいろんな対象に適切に使わせて、迫れるようになることがいいことなのではないですか。教科というのはそういうことを教えているのだということを考えて、すべての教科は対象についての知識も教えていますけど、その過程で用いるその教科ならではの知識や価値や美を生み出す方法を教えている。認識論的なものです。

だから見方・考え方は、その教科ならではの認識論的なアプローチだということです。それを教えようと。またそう考えると汎用的な能力とか言っていますが、やはり教科が大事です。教科が大事といっても、個々の知識をただたくさん身につけるのではなくて、その教科ならではの世界に対する迫り方をきちんと子供が身に付けて、それを全部の教科を通して上手に使えるようになることが大事です。そうすると教科が面白くなる。

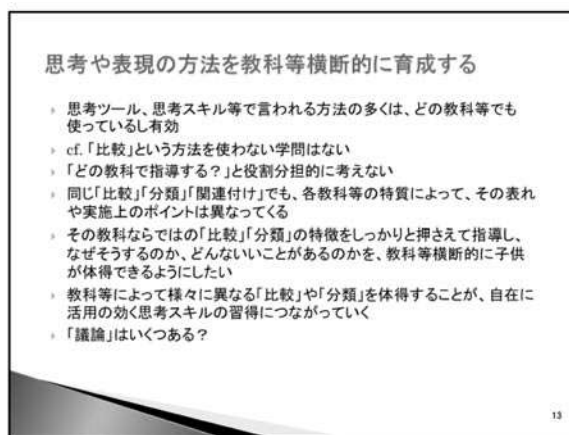
例えば、理科で言ったら近代科学、条件制御とか系統観察とか誤差の処理。小学校3年生から高校に向けて段階的に教えていると思います。これがそれと分かるようにもっとはっきりと教えたい。あるいは、社会科だったら多面的、多角的です。多面的というのは視点を移動してみる。同じ生産過程でも資本家の側と労働者の側でみるとかです。歴史でも為政者の側と民衆の側で、同じ事実が違う景色に見える。これが多面的です。多角的というのは、一つの事象を地理的、歴史的、政治的、経済的に眺められる。社会科はこういうことをやっ

ているのです。やっているのだけど、それとわかるように、やっぱりもっとしっかり教える必要があるのです。

また実際には毎時間毎時間コンテンツを教えています。そのコンテンツを通して、それがわかるようにしたい。例えば、理科だったら化学の領域は粒子、物理の領域はエネルギーを中心的な概念として、すべての内容を教えていこう。自然とそうなっています。粒子の存在と挙動。例えば、小学校4年生で空気は縮められるけど、水を縮めることはできないということをお教えます。でも、粒子を意識できていない。例えば、空気をぐっと縮めている時の空気のピストンの中の様子を粒で書いたり。小学校でもやるのですが、それが押し縮められる前と押し縮められた後で、粒の数が減っている子と減っていない子がいるんですよ。そこに教師が切り込んでいく。「これは減るの」って。「先生、かさが減っているのだから減るんじゃないの」って。「でも出入りがないんだから減っちゃいけないんじゃないの」。「じゃあどうなっているのだろう」。これは、粒子という概念を通して、物が実体的に存在することと、状態としての体積が変化していることを分けて考えられるかどうかです。これが科学的ってことです。粒子の数は変わらない。かさが変わっても変わらない、これ質量保存です。小学校4年生では質量保存は教えませんが、先々、質量保存につながっていくような概念的な理解を実験や観察の中で直感的にはもうやってるのです。

小中高の縦の系列でそれがきちんとやっていけるようなカリキュラムが必要だから、小中高の連携接続、学校間接続というのもそういうことを考えていかなければいけない。社会科もいっぱいあります。公正とか人権とか民主主義とか。地理は立地条件ということをやらずと考えるといいのではないかと。地理はプラタモリが正しい地理ですけど、あれはすべて、なんでここにこれがあるんだろうって問いです。それを自然地理的、人文

地理的に見ていく。つまり元々、地理は面白いものなのです。覚えるのではないのです。なぜという問い。問いの中心は立地条件、なぜここにこれがあるのかという問いで一貫しているのです。でも、これまでの地理ではそれが子供に身につけていないのです。思考や表現の方法を教科横断的に考えたいのですが、その教科は教科ごとに一つ一つやっぱり特徴を持った迫り方をしていますし、それがそれとわかるような授業にしたいなと思う。その上で、教科を超えてくることもあるし、そんな授業にも挑戦したい。



最近、思考ツールとか思考スキルとかということが言われて、文部科学省的には考えるための技法と言いますが結構入ってきています。例えば比べる、関連づける、順序づける、そんなのは思考スキルとして子供たちが考えるときにいつも頭のどっかに置いとけばいい。

比べてみたらどうかな。関連付けてみたらどうかな。順序づけてみたらなんかみえてくるかな、そういうのをもっとしっかり教えていこうということが言われています。これは教科全部で使えますよ。比べるってことをしない学問はありませんから。じゃあ比べるってことを教えればいいのですね。いや違うのですよ。教科によって比べ方が違うから、理科の比べ方と国語の比べ方は全然違いますから、同じ比べるでも教科によって比べ方の様相が微妙にしかも体系的に違うってことを教えるのが大事なのです。

今、思考ツールや思考スキルで比べるを頑張っ

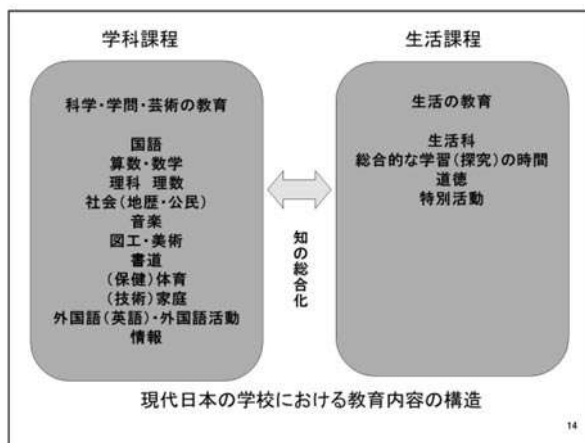
てみよう、関連づけるを使ってみようという学校はいっぱいあるんですけど、比べるや関連づけるが教科によって違うということまでわからせて、この場合はどの比べるを、どんな理由で、どんな風に使うのか。それがわかるように教えている学校はあまりありません。それをやりたいなと思います。高校の先生は各教科の専門性があるから、うちの教科で比べるというのはこういう時に、こんな理由で、こんな方法で使うんだよということを是非教科間でご議論頂きたい。

そして、その教科ごとの比べるを子供に教えると同時に子供はそのいろんな教科の比べるを鳥瞰的に見渡して、なるほど同じ比べるでもだいぶ違うのだな。するとまたそこから、教科によって比べるが違うってことは、教科はそもそも随分違うのだな、ということがまたよくわかっていく。すると初めてみる場面の問題解決ができるようになるんです。この場面ではどの教科の比べるを、どんな風に使えばいいのかが、しっかりと判断できる。そうすると問題解決力が上がってくるのではないかと思います。

最近話し合う、議論するというのを大事にする学校も多いです。もっと話し合う力を付けたい。その時に話し合う機会をいくら多くしても力は悪いけどつきません。単に話し合いの練習をするのではなくて、そもそも話し合うってどういうことかをしっかりと教えましょう。つまり国語と理科と社会と数学の話し合うは違うから。例えば理科の話し合いでは決着を着ける。決着が着く話し合いです。そこで使う言葉も操作定義された厳密な言葉です。社会科はどうですか。社会科の話し合いは決着をつけることもありますけど、妥協するとか折り合いをつけるとか、そんなネゴシエーション的な話し合いもいっぱいあります。美術とか音楽はどうですか、例えば鑑賞の授業の話し合い。決着なんかつけちゃいけませんね。折り合いとかつけちゃいけませんね。一人一人がゴッホの絵をこういう風に見てるよということとその子な

らではのものとしてちゃんと表現し、それをそう見てない子にちゃんと伝える。あるいはそれを知ろうとする。僕には全然そう見えないけど、面白い見方をあなたはしてるんだね。その子の背中に回ってその子が見ているゴッホの絵の景色を見たいなと願うような話し合いになるんじゃないのですか。

教科によって話し合いすら違うのです。多様な話し合いがあって、話し合いの前提、目指すべきゴール、途中の作法やルール、用いる言葉の様相だって、全部違うわけです。たしかに教科の授業ですでに使ってはいます。なので子供は経験はしていますが、それがそれとわかってないので使いこなせません。こういうことを、高校でぜひきちんとやっていきたいなと思っているのです。



そう考えてくると教育課程っていうのはこういう構造をしてるのかなと思います。これは小中高の教育課程を私なりに整理したものですけど、まず左側に教科があります。科学、学問、芸術の教育です。ここは先生方の専門学科の教科は入れていませんけど、さらにここに入ってくるわけです。ただ、専門学科の教科と普通科とか義務教育の教科はちょっと特質が違うのかなと思います。これをどう整理するかということもまた先生方に教えていただきたいな、議論したいなと思います。そして、科学、学問、芸術とちょっと違うのが右側です。

生活の教育。学校は科学、学問、芸術を教えています。でも生活も教えています。例えば、小学

校の生活科、あるいは総合的な学習・探究の時間、あるいは道徳や特別活動ですが、これは学問ではありません。生活のレッスン、民主主義のレッスン、集団生活のレッスンです。日本はこれを結構手厚くやってきました。この二つがしっかりと学校のなかでやられ、この二つが繋がってくるということが大事です。生活が科学によって支えられ、科学が生活と関連をしているんだということが見える。こういうことを考えていく必要があるんじゃないか。そうなるときに、生活の教育側で考えたのが総合なのです。

学校は広い意味での科学を教えるところ、教科を教えるところだろうと私はそう思います。ただ、元々、科学、学問というのは何か。それは生活を良くしようという先人の努力から生まれたと思うのです。

ところが、どんどんどんどん抽象度を上げてきて、生活との関係が僕らに、いわんや子供にとっても見えにくくなっていく。なんでこんなこと勉強するの。これが僕らの毎日の東京の暮らしとどう結びつくの。それが見えにくくなる。その意味で先ほどの生活の教育と科学の教育の結びつきが見えるような授業にしていきたいなと、そういう風にしていきたいなと思います。

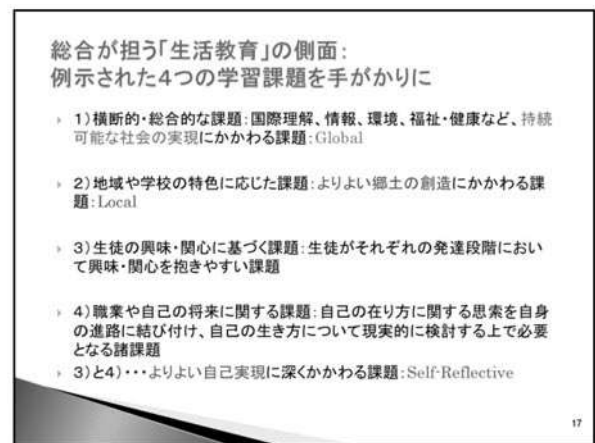
一方で生活の教育というのは気を付けないと理由を問わない教育になりがちです。生活科や総合でも、おばあちゃんの知恵袋みたいな、そういう知識ではなくて知恵だってよく言うのですが。知恵というのは気を付けなきゃいけないくて、よくわからないけど昔からそうやってうまくいってるからそれでいいんだよ、みたいな知恵もたくさんあるのです。それではまずいのです。いや、世の中はそれでいいのですよ。でも学校ってところは、事実に基づき科学的に吟味し、民主的に議論するということを少なくとも戦後の教育はモットーにしてきました。それで戦前を乗り越えてきたのが、戦後日本の教育です。事実に基づき広い意味での科学的に議論し、検討し、そして民主的な議論を

経て意思決定をしていく。これはやっぱり学校教育がもう幼稚園から大学までみんな大事にしていることだし、大事にしていかなきゃいけないことだと思います。

またそういう目で生活を吟味する。生活の科学的吟味ということが出来るのも学校の大事なことだ。地域のおばあちゃんやおじいちゃんの話を知るといいことも言ってくれるのだけれど、因習や迷信や差別的な見方なんかも混在していて、それでは困るのです。そこは知恵に学びつつ、それを乗り越えて更に良いものにしていく。あるいはこの時代に合った新たな知恵を生み出していく。別におじいちゃん、おばあちゃんの話がダメと言っているわけではないです。でも、やはりそれを相対化していく。それが大事。そして、時間を越えた相対化をする時に役立つのが科学なのです。科学や学問や芸術は、時代を超えた真実ですから。そこが大事です。そうすると、科学の教育と生活の教育の間で知の総合化をすること、互恵的な関係をつくるのがカリキュラムでは大事です。これは高校でまだまだ進んでいないと思います。もっと地域に出て、地域の人達と関わったり、自分の暮らしを探究的に作る学び。そういうことに取り組んでくださっている高校が増えていますけど、それをやっただけでは弱いのです。それが普段、教室でやっている教科の勉強と繋がるんだ。そこを見せてあげたい。そういうカリキュラムになると良いなと思います。

では、総合が担う生活教育の側面とはどういうものか。特別活動というのは集団生活。高校にはありませんけど、道徳というのは倫理的な側面。それに対して、総合が担うのは例示された学習課題を見ていくとこんなことがあります。

まず総合が担うことの1つは、横断的・総合的な課題。国際理解、情報、環境、福祉・健康など持続可能な社会の実現、ESD、SDGsです。こういう現代社会の問題のことを扱ってほしい。これを教えるのではないです。これらは、子供達が自



ら自分の生活を見つめ、自分達の生活を創造しようとすると、どうしたってぶつかっていくということです。

それから地域や学校の特色に応じた課題。これはよりよい郷土の創造、いわゆる地域創生ということです。これに取り組んでいらっしゃる高校も多いと思いますし、よいことだと思います。自分の足元を見つめて、自分達の暮らしをつくっていくということです。

それから、もう1つこんなものもあります。生徒の興味・関心に基づく課題。生徒がそれぞれの発達段階において、興味・関心を抱きやすい課題、あるいは高校には職業や自己の将来に関する課題ということがあります。1番と2番は社会的課題なのですが、3番と4番は、より個人的で、精神的で内面的な課題なのです。

この3つは大事です。まず地球が元気でないと困るじゃないですか。これが1番です。2番目、地域が元気でいてほしいじゃないですか。3番目、でも私も元気でないと困るじゃないですか。地球が元気、地域が元気、私が元気、これを目指すということです。総合ってすごく分かりやすいです。すると元気に頑張ってやっていけるぞという、総合ってそういうものなのです。それほど難しいのです。そういう暮らしを追求していく。創造していく。そういう学習だと思っていただければよいです。

4つの課題に共通するのは、答えが無いことです。従来の教科は何となく答えがありました。教



科も本当は答えはないのですが、一応暫定的な答えがあるというふうにしてきた。ところが、生き方には答えがありません。当たり前ですね。生き方なのですから。人間の生き方は元々答えがないのです。答えがないものを答えがないものとして、子供達に探究させよう。いろいろ探究し、いろいろな人の意見を聞き、やってみて最後はあなたが考えなさい。あなたが仲間と一緒に考えなさい。そしてまたやってみなさい。そしてまた振り返ってみなさい。そうすると、その子は生き方・在り方を自分で作れる人になるのではないか。それも、ただ個人でなく、地域の人達と地域の問題を見つめて、それから地球のことを考えて、そういう生き方・在り方ができるのではないかということです。

もちろん先生も正解は持っていません。先生は教えなくてよいのです。一緒に悩みましょう。一緒に走り回りましょう。それが求められている。だからデザイナーやファシリテーターやコーディネーターだよと言われるのは、こういうことです。先生達はずっと教えてきたので、これがなかなか慣れないのです。ですが、子供達と何か楽しい学校や地域の暮らしができないかなと思っていただければいいのです。あの子達と一緒にこの街で何かしてかそうみたいな。そうなった時に、専門学科の皆さんはしてかしてきたから、得意です。その技術を持っている、材料を持っている。やはりそこは普通科がまだまだ弱い。そういう感覚が身につけば、普通科の先生も皆できるのだけど。この頭の中の切り替え。「課題研究」なんかに1つのよいイメージを普通科の先生がお持ちになるといい。だから、普通科の先生が近くの農業や商業や工業、いろいろな学科でやっていることを見ていただいたらよいと思います。ああ、これはこういうことか、こういうことであればうちの地域でこういうことを一緒にできるな。いっぱいアイデアがあると思います。普通科の先生は、やはり学問をベースにしようとするので、そこが違うので

す。また、総合で扱う課題は、社会に生きる全ての人が自分事として受け止めて、ずっと一生涯暮らしの中で関わり続けて問題解決していかないといけない。

生活実践上の課題、暮らしの課題なんだと。地域が元気になるというのは他人事じゃない。自分事だと。しかも地域に暮らす皆にとっての自分事だと。でも、残念ながら地域によってはそうっていない。そこで、子供をだしにやっていきましょう。子供が頑張るってこの地域を元気にする。すると、大人達は意気に感じる。ありがたいと思う。そして、自分達が弱音を吐いてはいけない。子供達に負けないように頑張ろう。そういう風に、学校が打って出たことで地域が再生した事例がたくさんあります。ぜひ、今こそ高校が地域を元気にする拠点と思っていただいて、いろいろ地域にしかけていただきたい。面白いと思いますよ。そんなことは、従来の教科ではもちろん扱えない。だから総合で扱うということです。

大事なことは、生活教育というのは大人がよいと思う生活を押し付けることではありません。他人事みたいに学問的に研究するものでもありません。これまでの自らの生活の一部を自覚して、吟味して、より納得のいく自らの生き方・在り方を求めて暮らしをつくるのです。先生と一緒に。仲間と一緒に。地域の人と一緒に。こんな生活、こんな出来事ができたら楽しいな。素敵だな。一発してかしてみようと。これが総合です。自分達で望む生活をつくるから、当然プロジェクトになります。最近プロジェクト・ベース・ラーニング、PBLということが言われますけど、それはプロジェクトが大事というわけではないです。暮らすことが大事なのです。僕らが暮らしているということはプロジェクトなのです全て。私達の個人の生活も家族の生活も地域の暮らしも、皆プロジェクトなのです。全ての人生はプロジェクトだと。してかすことだと。プロジェクトXだと思っていただければいい。そうすれば学校は楽しくなります。

そして地域も元気になる。子供もそのプロジェクトをいっぱい経験して上手くいたり、上手いかなかったり、助けてもらったり、自分が貢献したりする。すると、大人になった時にそのプロジェクトをやっていける担い手になる。そういうことなのです。

専門学科の「課題研究」も、基本的には同じ。もうすでに申し上げてきたとおりです。専門学科の場合は、入学時にある種の契約として、すでにここをやるよということが約束されているわけです。農業高校に来た子は本当にやりたかったことは別として、農業高校では農業を専門でやるよというお約束の中で、来ていますから。だからそのことで「課題研究」をやるのです。普通科はここが難しい。そういう約束がないから、お互いに。そこでやはり課題づくりが圧倒的に難しくなっていく。だから、さっきの地球が元気、SDGsやESDとか考えていただいたり、地域が元気、地域創生で考えていただいたり、私が元気になるキャリアとか、そういうことで考えていただければやりやすいかなということなのです。

具体的な実践を1つご紹介しましょう。中学になってしまうのですが、中3の子達が、地域の自然環境ということで、川の掃除をよく行うのですが、地域の川が汚れている。綺麗にしたいな。でも川はいくらやっても綺麗になりません、流れていますから。やってもやっても、駄目だと泣き言を言うのです。それで、ボランティアで地域の掃除をしているおばちゃん達と出会うのです。学校に行く前に早朝おばちゃん達と掃除をやっているのです。おばちゃん達に「いくら頑張っても駄目なんだよ」と弱音を吐くと、おばちゃん達は「平気。いいのよ、自分達がやりたくてやっているのだから。」「やめてしまうともっと汚くなるし。」「それでも長くやっただから、仲間も増えてきたよ。」「どのぐらいやってるの。」「15年かな。」って言うのですね。おばちゃん達にとっては、15年は大したことないけど、子供からすれば、「えっ、私が生

まれてから今日まで、これがずっと繰り返されてきた。多分これからも繰り返されていく。それで一体何だろう。」と気が遠くなるような話です。こういうことに気がつくことが大事なのです。世の中分かっていると思っているようで分かってないのです。そういう時に問いが生まれる。「環境問題を解決するって思ってたけど、解決されるってどういうこと」って。「ボランティアって何」と、分からなくなるのです。分からなくなると、子供はちゃんと考えます。子どもたちがちゃんと調べた結論は「人間がいなくなれば、旺盛な経済活動が行われなければ、自然環境が保全されるらしいです。」そうなのです。環境問題の解決のためには人間が消えればいいのです。人間が消えれば、何百年かかかるけど、地球は元通りになるそうです。こういう厳然たる現実をちゃんと突きつけるのです。一瞬、絶望しますね。でも絶望から立ち上がってくるということが、生き方として本当に深いのです。それで、中学生たちはどう考えたかという、「先生、私たちがなくなるわけにはいきません」と。ここから新たな探究が始まります。

まず、経済活動を縮小すると豊かな暮らしにならないじゃないかと言う子がいますが、豊かな自然がないのに豊かな暮らしって何って。経済活動って何。開発って何。私達が経済活動をするということはもちろん必要で大切なこと。でも何だろうと。これが持続可能な開発という問いです。もちろん、開発するし、成長するのです。ただ、持続可能にする。あるいは、僕ら先進国と開発途上国の間で、その格差がないようにする。どうするのですか。それが今突きつけられている。もちろん、すぐには解決などできません。でも、そういうことをちゃんと思い悩む、引き受けるということが大事なのです。環境負荷や持続可能な開発という言葉は勉強しているわけですが、それが自分の実感あるいは痛みを伴って感じられる。そうなった時に、理解も本物になるのです。教科の学力も本物になります。これが大事なことです。だから

やはり教科と生活が結びつく。面白いですよ。「先生、解決というのはね、問題が消えて無くなるわけではない」と言っていました。そこで、この子達なりに解決という概念を定義しました。とりあえず不都合のない状態にとどめる。今より悪くならないようにする。影響の及び方に明らかに不平等がないようにする。こういうことを中学生が気づいていく。これが生き方が深まるということです。

だから最後は概念的な理解、知的な理解なのです。でも、いきなり知的な理解ではないのです。活動して、痛みを感じて、悩んで、そして最後は知的理解です。やはり学校ですから。そこは大事です。人間は、誰でもとんでもない思い違いをして生きているのです。よかれと思ってあちこちに迷惑かけているのです。このことに気づくことが大事かなと。

多文化共生という意味でもです。世の中には、普通や当たり前などないのです。普通や当たり前と言っている人が世の中を悪くするのです。こういうことに気づいていくということが、とても大事だと思います。生き方というのはやはり理解だと思います。更にそれでまた現実の暮らしが変わっていくことだと思うのです。

例えば先ほどの子達がこんなことを言っていました。「先生、結局世の中に普通や当たり前なんか無いよ」と。「普通や当たり前というのが差別や不寛容の元だよ」と。「思いもしなかった出来事と出会うことは、今の私にない素敵な世界と出会えることだよ」と。だから、私が考えもしなかったことを言っている人を変なのとか、おかしいと言うことは間違いなのです。自分が思いもしなかったことは私が成長するチャンスなのです。こういう理解に子供を変えていかないと。だからいじめとかもなくなっていく。いじめをいじめとして無くすのではないのです。それも大事ですが、彼らの生き方が深いところで、つまり概念的な理解が変わっていけば、ねこそぎ彼らの生き方は変わりますから。

すから。なので、ぜひ総合的な学習・探究にお取り組みください。自分とは異なる人が私を成長させてくれることに気付く。これからは多文化共生の時代です。インクルーシブ、包摂的な社会が、とっても大事になってきます。自分が立っている立場を意識することで、公正な判断ができるようになる。これからの教育が目指すのは、持続可能な社会、包摂的で公正な共生社会ということです。



OECD なんかでも言っていますが、資質・能力がゴールではないです。これは OECD の 2030 年のモデルですけど、先にお話したコンピテンシーは問題解決をする力です。その問題解決をする力を何に使うか。ここに価値・倫理があります。それは、個人と社会の Well-Being のため。私自身がよりよく生きる。私自身が自己実現する。そして社会がよりよいものになっていく。世界がよりよいものになっていく。これが Well-Being です。そのために私が私の学んだことを使う。

教育や学力のモデルが、世界的にはすっかり変わっているのです。教育の目的としての包摂的、インクルーシブ。そして持続的、サステナブルということです。日本の指導要領もそうです。これは高校の指導要領の前文にもありますが、持続可能な社会の作り手という言葉があります。ぜひ高校の先生方は校内の皆様と今一度確認をください。この前文が大事です。これは、昭和 22 年の教育基本法の「平和で民主的な国家及び社会の形成者」以来の言及です。70 年の時を経て、もちろん「平和で民主的な国家及び社会の形成者」も引き続き

大切なのです。でも、それを今日的な文脈で言い直すとするれば「持続可能な社会の作り手」なのです。

さて、最後に「令和の日本型学校教育」の話を申し上げます。2021年に出た中教審答申のタイトルで、副題は「全ての子供達の可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの実現」。これは、今回の学習指導要領を実践化する上で、もっといろいろなことを考えなければいけないということで、今後必要となる条件整備について書かれた文章です。

そんなことで令和の日本型学校教育ということを出したのですが、令和の日本型学校教育があるということは、従来の日本型学校教育があるということです。こんなふうに書かれています。「子供達の知徳体を一体で育む」。あるいは全人的な教育。これは日本はちゃんとやってきました。

でも、弱い面もあるのです。まず1つ目は、皆と同じことができる。言われたことを言われたとおりにできる。正解主義ですね。答えが決まっている学びで、これからの時代は最適解や納得解が求められますから、これでは困ると。そしてこれが面白いのですが、なぜこのようなことに日本の学校がなっているのか。我が国の経済発展を支えるために、高度経済成長期までの社会、特に経済界や産業界の要請としてそうだったのではないかと。これが決定的に重要だと思います。つまり、昭和の半ばから、日本は確かにそういう教育をしてきました。僕らも受けてきました。ですが、それは教育界が本当によいと思って行っていたわけではないのではないか、ということです。むしろ当時の産業界の要請としてやられたのではないかと。当時は、そういう人材がたしかに要請された、上質で均質な労働者が大量に必要だった。だからそういう教育をしてきたのではないかと。皆さんはどのように思いますか。今、皆と同じことができる、言われたとおりに言われたことができる人はほしいですか。企業の皆さん。違いますよね。だから、経産省の「未来の教室」だって、もっと自分

で考えて動ける子や探究できる子を育ててほしいと言っているわけですから。つまり、もう産業界、経済界は完全に人材像が変わっています。ところが教育界は変わっていないのです。未だに正解主義をやっているのです。これは変えなければ。

つまり僕ら教育界はどんな子供を育てることがよいかを改めて考えないと。やはり惰性でやっているのです。かつてはこれで上手くいったのです。ジャパン・アズ・ナンバーワンの時代があったのです。でも、その時代に上手くいったということで、そのまま来ている。やはり考えなければ。今回の指導要領はそこを考えようという話なのです。学力論を変えようということです。コロナショックの時に、子供は学校や先生からの指示がないと、何をどうしていくか分からずに勉強しなかった。学びを止めてしまった。つまり先生が始めますよ、と言わないと学べない子供に僕らはしてきたのではないかと、という反省です。ここを変えなければいけない。自立した学習者にしなければいけない。自立した学習者は自立した生活者、自立した国民です。そういう子供を僕らは育てていかなければいけないのではないかとということです。

もう一つが同調圧力です。学校が皆で同じことを同じようにということを経験的に要求する。同調圧力を感じる。これがいろいろな問題を生んでいる。いじめの問題、生きづらさ、非合理的な精神論、努力主義、詰め込み教育を生んできたのではないかと。つまり日本型学校教育にはよい面もたくさんありますが、正解主義と同調圧力という悪さをしてきたものもある。そこを乗り越えて全ての子供を自立した学習者に育てたいということです。そのために、ICTを活用しながら、自ら学習を進めていける、そういう個別最適な学び、それから僕らが伝統的にやってきた協働的な学び。これを一層充実させていこうということです。

協働的な学びの方は、日本は結構きちんと行ってきたし、高校でも皆さんいい授業をやっている

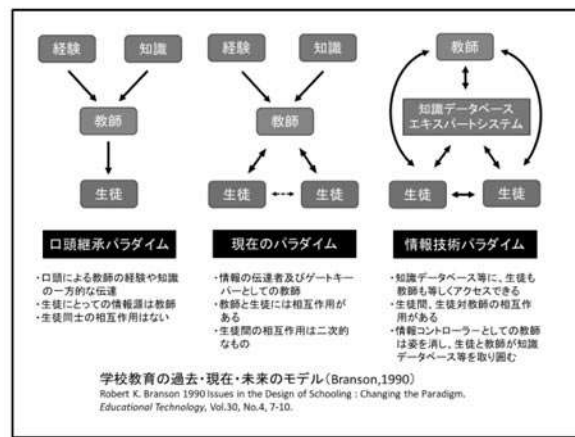
しゃいます。個別最適の方のイメージがなかなか湧かないと思いますが、高校の良い写真がなかったのですが、これは中学校の2、3年生が教科の個別の学習をやっているところです。先生は前に立ちません。課題は先生がもちろん提示しているのですが、それをどんな風に学び進めるかは、子どもたちが一人でやったり相談してやったり場所を選んでやったりする様子です。



教科書や資料集やコンピュータを使ったりしながら調べて、自分の考えをまとめてレポートを作ることは小学生でもやっています。ここはコンピュータが強いです。やはり動画が見られたり資料が見られたり。教科書と資料集だけでは正直言うと情報が足りません。だからICTが来てから本当に出来るようになりました。面白いのは一人でやる子もいれば、仲間とやる子もいるんです。教室が良いって言う子、広い場所が良いから特別教室が良い、子供はいろいろです。これがつまり個性ってことです。

このようなモデルがあります。1990年にアメリカのブランソンという教育工学の先生が書いた過去・現在・未来のモデルです。

過去のモデルというのは、本当に古い明治時代の先生が一方向的に教えるやり方。これはもうありません。日本の小中高等学校では真ん中のモデルになっています。つまり先生と子どもの間に相互作用がある。子どもの同士の間にも相互作用がある。そして先生が提示したものを学ぶということです。日本だったら更に生徒と生徒の間の矢印が



ぐっと強い実線でしょう。アメリカはこれが弱いからブランソンは点線にしています。日本の授業の方がもっと活性化しています。高校の授業だってもっと子どもたちと一緒にいろいろやりながら学んでいます。でも問題は上半分です。いくら子供達が活動的にやっても最初に先生が「始めますよ。今日はこれをやりますよ。これについて考えてみよう」。イニシアチブは全部先生が握っている。どんなに活動的で子供主体の授業でも。ブランソンはここを変えたいと考えました。

一番右のモデルが未来のモデルです。1990年の未来ですからもう来てなくてはいけません。情報技術パラダイムといいます。ICTが普及して一人一台のコンピュータが来て、これがインターネットと繋がって、子どもたちが取りたい情報をいつでも自分のタイミングや都合でどんどん取れるようになる。すると先生が「始めますよ。これを考えてみましょう、先生が説明しますよ」と言う必要がないのではないかと。さっき申し上げたように、昔は先生が説明しないと子供は何一つ学べなかったのです。学べなかったから先生が教えたのです。でも、今はコンピュータを使って、3分の動画を観ることで子供は結構学べるのです。だったら3分の動画を子供達が観たいタイミングで観たいように観ればどうかという話です。これが右側のモデルです。つまり子供達が直接的に知識や経験にアクセスする。先生も子供と同列の位置に居て、子供と一緒に学ぶのです。もちろん、先生は必要な支援をしますし、時にはしっかりと

教えもします。でも、従来のように四六時中教えてはいないわけです。

子供達は自分が今考えたいことや、課題があるにしても自分のペース、自分のタイミング、自分のやり方でやるのです。これが実現されるためにパラダイムを変える必要があるのです。つまり授業のモデルを変える。日本の先生は子どもの問いを大切にしています。でも子供の問いを大切にする時もこうじゃないですか。「今の皆さんの議論を聞いていると、こういう問いが成り立ちそうですね。このことをこのあと問いにして、みんなで考えてみましょう。」たしかに子供が出したものだけ、必ず先生を経由して、先生の問いとしてもう一度黒板に書いてからやる。子供がこのことが不思議だな、これを調べてみようかなと思って、いきなり調べてみることはあまりなかった。これを変えたらどうですか。全部変えなくていい。多くは真ん中でいいです。ただ少しずつ右側のような学びの場面を作っていくというのが一つの提案です。これをするためには一人一台の端末と高速大容量のネットワークが必要です。それが出来るようになってきたのです。逆に言えばそういう環境が無かったから、僕は情報を提供してきたのです。僕らが整理した情報を僕らが提供してきた。でも、ついに変わります。一生涯子供達は手元にスマートフォンがある環境で生きていくのです。授業のモデルを変える必要があります。



ICTだけでなく、環境による教育  
(学習環境整備)も同じ原理

これを未来の教育だとブランソンは言いますが、実は違います。幼稚園は既にこれです。普通の幼

稚園では、はさみもセロテープも毛糸も折り紙もいつでも準備されていて、私が使いたいときには私が使いたいだけいつでも使えるようになっていきます。これはさっきのブランソンの右のモデルと同じです。子どもは幼稚園までこの状況に居ます。ところが小学校に上がった途端、手はお膝、口チャック。「今日のはさみを使います、先生がはさみを配ります、1班の人だけ前に取りにいっちゃい。」お願いだから止めましょう。高校でも先生がプリントを配っていますが、何をしているのだろうと思います。先生の都合で先生のタイミングでプリントを配るのですか。何で子供のタイミングでプリントを取れないのですか。

中学で単元分のプリントを全部いきなり最初に渡すことをやっています。それだけで変わります。3時間目のプリントも1時間目にもらう。すると、3時間目にこんなことをやるのだなと見通しをもって1時間目の勉強をします。大事なことはモデルを変えることです。子供と先生、知識と経験の関係を変える。すると子供は主体的になります。

現状では、いつも先生に聞かなくていい。「先生やっていいですか。」「先生次は何をしますか。」「何でそんなに先生に聞くのですか。」「もっと自分で考えなさい。」「指示待ち人間ではいけません。」そう先生は言いますが、先生の指示がないとやっていけないルールになっています。そこを変えましょう。先生の預かり知らぬところでどんどんやっていくことにしましょう。難しくありません。幼稚園はやれています。小学校以降も同じことにすればいいのです。

環境を整備するのが教師の仕事です。子供達がいつでも使えるようにするのは、どんどん子供に開放して、子供の都合とタイミングで情報にアクセスできるようにしてあげれば変わります。理科の授業も変わっていきます。子供達の都合とタイミングで実験や観察の道具を使うのです。自分たちのペースとタイミングでやらせてあげれば良いではないですか。そのほうが絶対に出来るよう

になるし理科好きになります。もちろん少し仕組みは必要です。幼稚園とは違って、小学校以降はこの内容をこの時間でやってほしいっていうことがあります。これをちゃんと情報開示しなければいけません。単元の指導計画を子どもに渡せば子どもはできます。ただプリントを渡しただけではダメです。プリントが位置づいている先生の授業構想なり文脈の情報を渡してあげないといけない。8時間の学びの筋道を渡してあげないと。たとえるなら、旅行に行く時に旅程表や地図を渡せというだけです。今までの授業は、旅程表も渡さずに僕は子供をバスに乗せていたということです。それでは主体的になるのは無理です。ガイドブックと地図と旅程表を渡してから、どうしようかって言いましょうということです。それをしないから「先生次は何をしますのですか」って聞いてくるんです。主体的にならない。

最後にこんなことを考えましょ。令和答申の中で最後の高校改革のところではいろんなことが書かれていますけど、一番大きいのは普通科の改革です。普通科の弾力化・大綱化です。普通科高校の特色を活かしてやっていくということですけど、例示として二つ出ています。現代的な諸課題のうち、SDGsの実現や、Society5.0ということを見据えてやっていこうということ。もう一つは地域創生です。この二つなのです。さっき言った総合の社会課題の二つなのです。つまり子供達が今の現実生活を見つめ、自分を見つめたときにやはり目の前に迫ってくる二つの大きな取り組むべき課題なのです。これを一つ足場にして普通科高校のカリキュラムや学力論とか子どもの育ちというのを考えたらどうか。そして大事なことはこれと教科を結ぶってことかと思ひます。いろいろやって下さいということですよ。

最後にですけど、今高校にスクールミッションやスクールポリシーというのをきちんと作ろうというのも大事なことなのです。一体うちの学校は何を目指すのかってことを、もっとはっきりして

いく。これはぜひ打ち出していただきたい。ただ実効性のあるものにしましょう。お題目にはいけません。つまりスクールポリシー、スクールミッションは、校長先生を中心にみんなで話しあってお決めになると思ひますけど、それが先生方にとって毎日の授業とか子供との関わりの中で常に頭をかすめているかということ。かすめていなければ実効性がありません。子供達もスクールポリシーやスクールミッションのことを考えながら動けるようなものにしましょう。これが大事だと思ひます。従来の学校教育目標単なるはスローガンになっていた。だから使っていなかった。



これは国際バカロレアの10の学習者像ですけど、結構実効性があります。大泉の付属とかはこれをやっていますけど、先生方は毎日授業を、この10の学習者像を考えながらやっている。生徒も考えながらやっている。是非、実効性のある目標にして学校の活性化に繋げていきたいと思ひます。

すみません、長くなりました。一旦終わっているいろいろとご質問いただければと思ひます(以下、質疑応答。省略)